

## 「共同研究」への問い直し

来週から全校授業が始まり共同研究が本格的に4年目に入ります。この冬休みに校長室に保管してある過去の研究紀要や「もくせい」に目を通しながら私たちがなぜ「共同研究」を行っているのか、その目的について原点に戻って考えてみました。

研究の目的としてあげられることは子どもの姿を変えること、言い換えれば私たちが日々の授業を通して子どもに力を付けることです。このことは一貫しています。だから「教師は授業で勝負する」という齋藤喜博氏の考え方は今も脈々と私たちの中に残っているのだと思います。

では、今の附属小の子どもたちの様子を振り返ってみましょう。過去3年間の学テの結果やNRTテストの結果をもう1度調べてみました。全般に学力は高く、概ね生活習慣も良好です。また、なかよし運動会や合唱の会などの行事で見せる子どもの姿も申し分ありません。朝は寒くても元気に校庭で遊びます。多少のトラブルはありますが、子どもたちの心も育っていて、校庭では歓声が途絶えることがありません。昨日、今年度の保護者の皆様からの学校評価の結果の報告を受けましたが、附属小への評価はこれまで同様大変高いものを頂いています。

総じて言えば今の附属小は概ね平和な学校です。

だから、少なくとも校内研究で子どもたちの姿を劇的に変えなければならないという切実感とはかけ離れているように思えます。私はこの背景には、私たちの教育活動が「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」を育てることを40年以上一貫して求め、合唱活動や体育的な活動そして、何より日々の授業を大事にしてきたことにある、と考えています。

では、なぜ私たちは「共同研究」に取り組むのでしょうか。

もう一度「共同研究」の頭書きを読んでみます。とてもよく書けています。でもこのよく書けているところが、少し気になるところでもあります。

その1つに校内研究が長いスパンの研究になっていることです。本研究も4年計画です。昨今職員の異動が多くなっている附属小にあって、昔ながらの長期間の研究が果たしてどのくらい有効なのか疑問です。また、どうしても「共同研究ありき」なので、各教科が「下請け」のような位置づけになってしまっています。乱暴な提案ですが、たとえ附属小であっても、1年勝負の研究や従来の教科部にこだわらない提案もこれからは求められるのではないのでしょうか。実はこのように考えるきっかけは先生方の今年度の様子の中にありました。

1つは11月に学年で取り組んだ英語の公開授業です。最終年度の今年は、学年主体で取り組み、事前授業から当日の授業提案まで見事なチームワークで取り組みました。もちろん英語科や学年主任のリーダーシップによるところは大きかったと思いますが、この学年研究のあり方は、今後も何らかの形で継続する価値のあるものではないのでしょうか。

2つ目が、話題の「算数サークル」であり、昨日案内のあった「ESD勉強会」など校内からの勉強会の発足です。この流れは、今後の附属小の研究のあり方や教科部のあり方を根本的に見直すきっかけになるように思えます。さらに「算数サークル」が2月3日(土)に5年生の子どもに登校を呼びかけ、自主的に授業公開を行おうとしています。算数部は2月27日に5年生で全校授業が予定されていますが、それとは別に「自主公開」を行うということは全く初めての試みです。このような現在の流れは、共同研究のもとでの「公開」というこれまでの慣習を打ち破った画期的な提案として魅力的です。一方、このことが現在の共同研究のあり方の限界を示していることのようにも思えます。

特に今の附属小の先生方の研究や研修への意欲そしてアイデアは少なくとも私の予想をはるかに超えています。やらされているものではなく「やるもの」「苦勞してつくったもの」は本物になる可能性があります。有識者会議で附属の存在意義が問われている今だからこそ、共同研究のあり方が根本的に問われる時期になっているように思えてなりません。

(文責：副校長 手代木)